

蒲生干潟で見られる野鳥とそれらを支える生態系⑤



Fig.1 トビ

ネズミのようなものを食べている(Fig.1)



Fig.2 シロチドリ

ゴカイのなかまを探り当てた(Fig.2)



Fig.3 オナガガモ, オオバン

潜水して餌を探している(Fig.3)



Fig.4 ミサゴ

潟湖上空を飛ぶ(Fig.4)



Fig.5 カムリカイツブリ

首をたたんだ休息姿勢(Fig.5)



Fig.6 ツグミ

地上を歩き回って餌を探す(Fig.6)



Fig.7 ヒドリガモ

頭の赤いオスと地味なメス(Fig.7)



Fig.8 マガモ

オナガガモとの混群をつくる少数のマガモ(Fig.8)



Fig.9



Fig.10



Fig.11



Fig.12



Fig.13

食べられたクルミ (Fig.9) 地上の分解者たち (Fig.10, 11) 水中の分解者 (Fig.12) 繁茂するオゴノリ (Fig.13)

調査日 2026年1月16日 (金) 14:30~15:30, 1月22日 (木) 13:45~15:15

トビが地上で獲物を食べている様子が見られた (Fig.1)。おそらくネズミのような小動物だと思われる。シロチドリがゴカイを土中から探り当てて食べている (Fig.2)。オオバンは潜水して水底の植物を食べている (Fig.3)。獲物を探してか潟湖の上空をミサゴが飛んでいた (Fig.4)。多くの水鳥は首を後ろに向けて休息姿勢を取るがカムリカイツブリは正面を向けて首をたたむ (Fig.5)。ツグミは木の実がなくなる時期になると地上を動き回って昆虫の幼虫やミミズを探して食べている (Fig.6)。この日も移動しては止まり、移動しては止まりを繰り返しながら餌を探している様子が見られた。潟湖北側と七北田川で数羽のヒドリガモが見られた (Fig.7)。この数か月はオナガガモの数が圧倒的に多いが、その中に少数のマガモが混ざり混群を作っている (Fig.8)。潟湖東側の砂浜に一部が割れたクルミが落ちていた (Fig.9)。干潟内に生えているものではないため、野鳥がどこからか運んできて食べた殻かもしれない。砂浜の流木をひっくり返してみるとワラジムシ (Fig.10) やダンゴムシ、スナゴミムシダマシのなかま (Fig.11) が越冬していた。これらの生物は干潟の環境を支える陸上の分解者たちである。水中にはホソウミナナの貝殻をかぶったヤドカリが複数見られた (Fig.12)。ヤドカリは水中の生態系における分解者である。潟湖内に繁茂しているオゴノリと見られる海藻は、そのものが海鳥の餌になるというよりは、様々な生物の住処として環境を支えており、海鳥はそれらの生物を隙間から探して食べている (Fig.13)。(伊藤勝彦)